第6章　勧告と結論

既に指摘したとおり、この論文に提示した脅威評価及び指導・介入のモデルは1999年に全米暴力分析センターがバージニア州リーズバーグで開催したシンポジウムでの討論の焦点となったものである。このモデルに含まれる概念や方法は研究を継続することで更に展開され洗練できることを注記した上で、シンポジウムでは次の勧告を行った。

> 脅威事件に関係する生徒たちの精神衛生上の必要性に対応するために、以下に勧告する脅威評価モデルを現場で検証（Field Test）し、評価を加え更に展開するとともに適切な指導・介入モデルを作ることが、差し迫って必要である。

このシンポジウムは、今後、下記のトピックスについて調査研究の必要性があることを勧告している。

- 校内発砲事件で訴追され有罪となった犯人における変質者(Psychopath)的あるいは自己陶酔者（Narcissist）的な個人性向の存在。
- 脅威評価及び将来の暴力予告のための、口頭又は文書による「リーケージ」の重要性と妥当性。
- 学校においては、どの特定の学校力学が顕著な危険要素（Risk Factor）であるか。
- 校内発砲に関わった青少年における、自殺と自殺の観念化（Ideation）の影響と妥当性。
- 校内発砲者の個性、背景及び家庭環境と、他の暴力青少年の個性、背景及び家庭環境の顕著な共通性を識別すること。
- 校内発砲青少年と職場発砲事件の犯人との間の顕著な共通点の識別。
- 教育者、法執行関係者及び社会サービス部局が、脅威を行った生徒の意図、手段、及び動機を評価し、その生徒が脅威した暴力行為を実行する危険性を評価するのに役立つ情報の、共有を阻止し妨げている関連法規及び機密保持要件の見直し。

シンポジウムは更に次の通り追加勧告を行っている。

学校暴力の捜査

脅威評価の根拠を更に広げるために、校内発砲あるいはその他の校内暴力行為が発生した後、その生徒の生活における4側面、すなわち(1)個性、(2)家庭力学、(3)学校力学、(4)社会力学について、更に情報を得るための捜査が行われるべきである。

訓練

この論文で略述した脅威の評価及び指導・介入手順を有効に利用するために、学校管理者及　び職員は、脅威の評価、青少年の成長と暴力、並びに青少年の成長に関連する精神衛生問題の基礎項目に関する追加訓練を受けるべきである。評価手順の実行者及びその管理者のためには特別訓練が必要である。

暴力の脅威に対処する上で「リーケージ」が重要であることを青少年に教育し、それに対して敏感になる（Sensitize）ための訓練も必要である。生徒たちは暴力の可能性に関する手がかりを見聞きできる最善の位置にいることがしばしばある。この訓練では、これらの手がかりを無視しあるいは沈黙を保つことは他人にも自分にとっても危険であることを強調する必要がある。この訓練は更に、ティーネージャーに共通の「無言律」、「告げ口屋」といわれることへの抵抗、並びに友人の信頼への裏切りの問題に直面する必要がある。

この訓練に含める必要のある項目は次の通り。

・学校内に「学内チーム（Internal Team)」を結成し、脅威的行為に関する情報を内密に知らせるように生徒を勇気づける方法を検討する。
・「生徒援助計画」を作成し関心のある教師を招集して、学業に問題のある生徒、行動に問題のある生徒、家庭に問題のある生徒に関して討議する。
・「仲間支援グループ」を結成し、生徒たちの間の暴力行為の可能性に関する情報を提供して貰う。併せて無言律を破ることに対して生徒が抱く自己疑問（Self-doubt）や罪の意識に打ち克つための生徒への支援を提供する。
・子供が精神的障害を起こしたり社会的に孤立している、あるいは拒絶されている状態を両親が識別するのに役立つような支援実行計画、またどこへ行けば支援が得られるのかの情報を提供し、もっと両親が支援を受ける気持ちになるような両親支援実行計画を作成する。

結論

暴力--それが学校、家庭、職場、あるいは路上のどこで発生したものであっても--は複雑な原因と複雑な結果を持つ複雑な問題である。暴力には簡単な解答と瞬間に解決できる方法があると想像することさえ非生産的である。暴力の原因を解明できる容易な方法はなく、暴力行為の実行者を予言できる簡単な公式もない。しかしながら、暴力行為は漸進的に進行するものであり、脅威は進化の過程の一段階であること、そして何を見つけるべきかわれわれが知っていれば、その進化の過程において観察可能な暴力実行の兆候があるのも事実である。

全体として、米国の学校暴力のレベルは減少傾向にあり、上昇傾向にはない。しかし最近発生した校内発砲事件とそれに引き続く他の暴力事件による衝撃と恐怖は、学校暴力の脅威に関する一般の強い懸念を引き起こした。この環境下で学校としては、脅威は全て異なるという理解をもって、あらゆる脅威に対して迅速に、責任を持って、公平に、敏感に

対応することが極めて重要である。

口頭・文書であれシンボルであれ、脅威のメッセージに反応するだけでは十分ではない。脅威を行った人物が脅威を実行する意図、手段、並びに動機を持っているかどうかを評価することも致命的に重要である。この論文で紹介した評価手順は学校が脅威及び脅威者を評価し、脅威を実行する危険性を評価し、その危険に適切・効果的に対応するのに役立つものと考える。

生徒はこれからも学校内で脅威を続けるであろう、しかし、その脅威の大部分は実行されることはないであろう。ここで紹介した評価・指導・介入モデルを利用すれば、最大の関心事である危険性の高い脅威を学校当局が識別して対応し、危険度の低い脅威に対しては計算された方法で対応するのに役立つ。このように危険性を区別して対応することの重要性は学校外の一般社会でも認識されるべきである。

学校内の脅威は学校だけの問題ではない。従ってその解決も学校だけの問題ではないのである。